

土器の移動に関する一考察

—— 庄内式土器を中心として ——

阿 部 嗣 治

I 前提

庄内式土器は、狭義にはその特徴的な形態・技法・胎土を示す甕のことを指し、広義には古墳出現期の土器の一型式を表わすものである。本稿において庄内式土器とは、広義の意であり甕については、胎土の問題を除き、特徴的な形態、技法を有していればすべて庄内式甕と呼びたい。その胎土の問題は、従来、庄内式土器の中で甕は、いわゆる河内の土器、あるいは生駒西麓産の土器と呼ばれており、胎土中に混和材として多量の角閃石、雲母を含んでおり、色調は暗褐色を呈している。河内以外の地域でも、在地の胎土を使用した生駒西麓産の庄内式甕と同様の形態、技法を持つ甕が認められる。このような模倣した土器も庄内式甕と認定したい。⁽¹⁾

この庄内式土器の研究は、昭和39年田中琢氏が、第Ⅴ様式と布留式土器との間を埋める土器型式として豊中市庄内遺跡出土土器を検討し、「庄内式土器」と名々したのに始まる。⁽²⁾その後、昭和43年に原口正三氏は、庄内式土器を松原市上田町遺跡の調査で、より純粋なセット関係で呈示するとともに、その前後における技法変遷を層位的な関係で追求した。⁽³⁾この2編の論究の土台となったのは、昭和37年柏原市船橋遺跡の調査で出土したK-I B、V-IIの土器群が布留式土器に先行する土器群であるとの評価を与えたのに起因する。⁽⁴⁾さらに、石野博信氏、関川尚行氏は、桜井市纏向遺跡より出土した庄内式土器を、古墳時代の土器として認識し、細分する試みを行なう一方、⁽⁵⁾都出比呂志氏は、庄内式土器を古墳時代の土器とは認めず、第Ⅵ様式として弥生土器の最終末に位置付けて理解している。⁽⁶⁾以上の諸論究において、弥生時代終末から古墳時代初頭における土器型式は、北鳥池下層(上田町第1層出土土器)→上田町第2層出土土器→小若江北式(布留式)と認識されており、この土器型式の中で庄内式土器は、上田町第2層出土土器が最も典型的であると理解されている。最近では、庄内式土器の編年的研究のみならず、庄内式甕が畿内各地及び西日本一帯に搬出されている事実から、その意義を探る研究もなされている。その代表的な論究に、都出比呂志氏の通婚圏の設定がある。氏は、弥生時代を通じて河内と淀川水系に点在する各集落間の土器の動きに基づき、それが通婚による各集落間の結びつきであるとの見解を出している。⁽⁷⁾さらに酒井龍一氏は、庄内式土器の中で甕が專業的に製作され、各地に搬出されているのに着目し、その搬出地が古墳造営の為に召集された労働力のキャンプ地であることを示唆することによって、庄内式土器を古墳時代の土器であると論究している。⁽⁸⁾

いま、庄内式土器の研究は、編年的位置付けのみならず、古墳の出現期をめぐる社会的・政治的背景の問題を含めて、新しい段階をむかえている。本稿では、数多くの先学の研究成果を踏まえて、庄内式土器を検討し、その実態を明確にして編年的位置付けを行ない、さらに、庄内式甕の分布例を集成し、分布地である地域の在地の土器群との関係を考慮しつつ、その意義を明確にしたい。このことは、庄内式土器が、古墳の発生という歴史的、社会的事実を解明する一要素になり得ると考えるからである。

Ⅱ 実態

庄内式土器を構成する器種は、壺、甕、高杯、鉢、器台、手焙形土器である。概して、器種形態、製作技法において、第Ⅴ様式とのつながりが深いが、一方では、土師器に特有の器種、形態、技法も随所に認められる。以下、器種ごとにその特徴を記する。

壺は、球形の体部に大きく外方へひらいた二重口縁を持つものが最も代表的である。二重口縁+櫛描波状文+竹管円形浮文というパターンをとり、さらに口縁部内面にも櫛描波状文をもつものもある。胴部外面は入念にヘラミガキを施している。このように装飾した壺はこの時期の大きな特徴であろう。その他、二重口縁でも口縁部が直立し、無文で大型の壺がある。さらに口縁部がラッパ状に開き、球形の体部を持ち、外面はヘラミガキ、刷毛目を施す壺もある。

甕は、庄内式土器の中で最も特徴の明確な器種である。その特徴は、くの字状に外反する口縁部を持ち、口縁端部はつまみ上げ気味に面を作り先端は尖らせている。体部はやや肩の張った球形あるいはたまご形を呈し、腹径は中位からやや上に位置する。底部は尖り底あるいは丸底が圧倒的に多く、一部には平底も存在する。胴部外面には細かい叩き目を施した後に、刷毛目を肩部、胴部下半におこなっている。胴部内面は全面にヘラ削りを施しており、それにより頸部内面に鋭い稜を有している。このように庄内式甕は、第Ⅴ様式の粗い叩き目とは一見して識別できる細かい叩き目を有し、さらに、第Ⅴ様式との決定的な差違の1つである内面ヘラ削り技法などを技術的な特徴としている。換言すれば、庄内式甕は、第Ⅴ様式の重要な製作技法である叩き技法を頂点まで発達させつつ、内面ヘラ削り技法を組み合わせることによって、煮沸形態である甕の機能性を追求した土器であることが言えよう。その他に少量ではあるが小型の甕が存在する。第Ⅴ様式と同様、くの字状に屈曲する口縁部に、端部は丸くおさめる。胴部はあまり肩がはらず、底部は平底である。胴部外面は粗い叩き目を施し、内面は刷毛目で調整している。

高杯は、杯部下半が短く外上方に若干立ち上がり、上半はわずかに外反しながら直線的に伸び、上半と下半の稜は第Ⅴ様式の高杯に比べて弱くなっている。脚部は、柱部と裾部に明瞭な屈曲を持っている。器表の調整は、ヘラミガキを多用しつつも概して粗雑な作りである。このように庄内式土器の高杯は、杯部下半の内弯、上半の外反といった第Ⅴ様式の特徴が消えつつあり、布留式土器に特徴的な杯部の直線化という形態を有している。その他、この時期に出現する椀状の杯部に、裾が大きくひろがる脚部を持つ高杯がある。この高杯は数量的には決して

多くはないが、精選した胎土を使用し、薄手で、器表には細かいヘラミガキを施して丁寧に作っている。

器台は、小形で脚部がラッパ状にひろがり、杯部は外上方に直線的に伸びてそのまま終るタイプと、端部が立ち上がるタイプとがある。調整は暗文風のヘラミガキ及び刷毛目を施している。この小形の器台は、やはりこの時期に出現し、布留式土器へとつながるものである。

鉢は、口縁部が若干内弯しながら外上方へ短かく伸び、端部は尖り気味である。体部は碗形を呈し、丸底である。体部外面はヘラ削り、内面は刷毛目を施している。このタイプの鉢は、やはり布留式土器に特有の小型鉢へと続くものである。

以上のように庄内式土器を概観してきたが、これをみると庄内式土器の中で形態、製作技法などにより、明らかに時間的な変化をたどることができる。すなわち、壺・甕、鉢の丸底化、壺、高杯などにみられる装飾の減少、甕外面の細かい叩き目から刷毛目の多用化、小型器台、小型鉢に代表される小型供献土器の出現などである。

庄内式土器の後に続く土器型式は布留式土器である。この布留式土器は、古墳時代の土器として認定されているが、庄内式土器については、弥生土器か土師器かという問題については、現状では定説がなく混沌としている。

布留式土器の確立は、東大阪市小若江北遺跡出土の土器群⁽⁹⁾をもってその標式とされている。その特徴は、形態的には壺・甕などに見られる体部の完全な球形化、丸底の底部、甕の口縁端部に見られる内面肥厚、技法的には装飾の消滅、叩き技法の衰退及び刷毛目の多用、底部内面の指頭圧痕などが上げられるが、最も重要な点は、小型器台、小型丸底壺、鉢をセットとするいわゆる小型三種の供献土器の確立であろう。これらの布留式土器を構成する諸特徴を庄内式土器に求めれば、前述したように、その先行的形態として大部分満たしていると言えよう。その中でも最も重要な点は、小型三種の供献土器の中で、小型器台、小型鉢が出現しているという事実である。この土器は、日常生活で使用する目的の土器ではなく、何らかの祭祀に使用目的があったと思われる。言い換えれば、布留式土器に見られる供献土器の確立が、古墳時代における祭祀形態の確立とするならば⁽¹⁰⁾、庄内式土器の中で、その祭祀の先行形態が成立して行ったとも考えられる。

このように庄内式土器は、セット関係、形態、製作技法など、第Ⅴ様式以来の特徴を残しながらも、布留式土器で確立する、新しい器種、形態、技法を取り入れた土器群であると言えよう。従って、庄内式土器が、弥生土器か土師器かという命題については、現状では明確な解答を得られない。しかしながら、布留式土器を構成する諸要素の始源が庄内式土器の中に求めることができる事実からすれば、庄内式土器をもって土師器とする考え方を示唆しているといえるのではなかろうか。

Ⅲ 分布

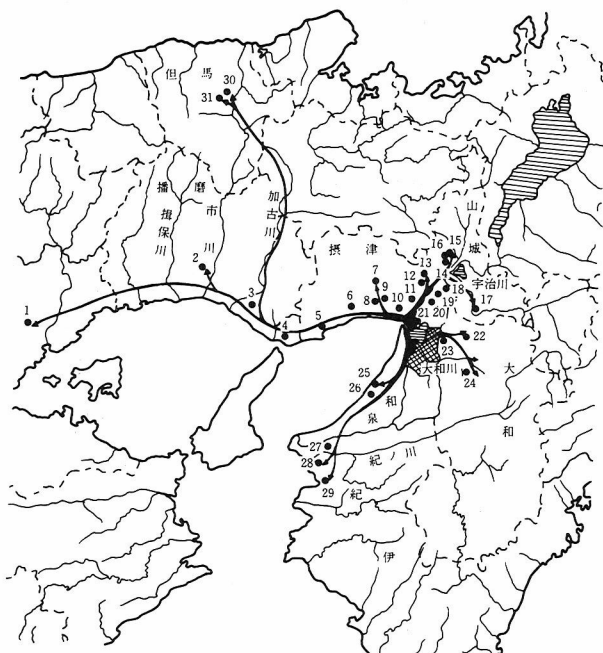
庄内式甕の分布には、二者があり、前者は生駒西麓産の庄内式甕、後者はその技法を模倣し

たもの、すなわち、技法の分布である。まず、生駒西麓産の庄内式甕の分布であるが、弥生時代における生駒西麓産の土器の分布と比べて著しく相違が見られる。弥生時代前期⁽¹¹⁾においては摂津、和泉、山城、東播磨など、比較的近接した地域にしか搬出されていないが、中期に入ると、摂津、和泉、山城、東播磨以外に、西播磨、備前、大和、紀伊が加わり、分布範囲が拡大するとともに遺跡数も増加し、その搬出量も飛躍的に増えている。さらに後期に入ると、但馬が加わり分布範囲は拡大化の傾向にあるが、遺跡数及び搬出量は、中期に比べて減少している。

弥生時代を通じて搬出される土器の器形は、壺が圧倒的に多く、次いで鉢、甕などが続く。搬出経路は、海岸線、大小の河川を重点的に利用して持ち運んだのであろう。このよ

うに、弥生時代においては、生駒西麓産の土器の分布範囲は、畿内が中心であり、畿外では、備前、但馬など一部の隣接した地域に分布している程度である。時期的には中期でも中葉（第Ⅲ様式）が中心であり、以後中期後葉（第Ⅳ様式）、後期（第Ⅴ様式）と、分布範囲は拡大するが、搬出量は著しく減少している。

庄内期に入ると、弥生時代の様相とは一転して分布範囲が比較にならないほど広範囲にわたり、器形も甕が中心になり他の器形の土器はごく一部地域を除いては搬出されなくなる。その生駒西麓産の庄内式甕の現在での分布限界地域は、東限が滋賀県東部、西限が福岡県東部、南限が和歌山県北部、北限が福井県西部である。東限を画する地域である滋賀県東部においては野洲町富波遺跡より出土している。他に滋賀県下では大津市滋賀里遺跡で出土例がある。この2遺跡に至る河内からのルートとしては、淀川を琵琶湖までさかのぼり、大津市付近からは陸上あるいは湖岸を渡って行ったものと思われる。西限を示す福岡県東部では津屋崎町今川遺跡より出土している。この福岡県は弥生時代においては考えられなかった遠隔地である。今川遺跡まで庄内式甕を持ち運ぶには、やはり瀬戸内沿岸を船で渡ったものと思われる。そのルート上には、神戸市吉田南遺跡⁽¹⁵⁾、姫路市長越遺跡⁽¹⁷⁾、岡山市百間川原尾島遺跡⁽¹⁸⁾で出土例がある。この



第1図 弥生時代の土器の移動図

- | | | |
|--------------|--------------|----------------|
| 1. 乙多見(Ⅲ) | 12. 安満(Ⅰ～Ⅴ) | 23. 萩原[小平尾](Ⅲ) |
| 2. 小山 | 13. 芝谷(Ⅳ) | 24. 唐古(Ⅲ) |
| 3. 東満(Ⅲ) | 14. 神足(Ⅲ) | 25. 池上(Ⅱ・Ⅲ) |
| 4. 大蔵山(Ⅰ) | 15. 霧ノ宮(Ⅰ) | 26. 下池山(Ⅴ) |
| 5. 楠・荒田(Ⅰ～Ⅱ) | 16. 森本(Ⅲ) | 27. 橋谷(Ⅴ) |
| 6. 会下山(Ⅳ・Ⅴ) | 17. 湧出宮(Ⅲ) | 28. 太田・黒田(Ⅱ～Ⅴ) |
| 7. 加茂(Ⅲ) | 18. 田ノ口山(Ⅲ) | 29. 岡村(Ⅲ) |
| 8. 田能(Ⅰ～Ⅲ) | 19. 茄子作(Ⅴ) | 30. 南八代田(Ⅴ) |
| 9. 勝部(Ⅰ～Ⅲ) | 20. 太泰(Ⅲ) | 31. 久田谷(Ⅴ) |
| 10. 東奈良(Ⅰ) | 21. 森小路(Ⅰ・Ⅱ) | |
| 11. 垂水(Ⅴ) | 22. 六桑山(Ⅴ) | |

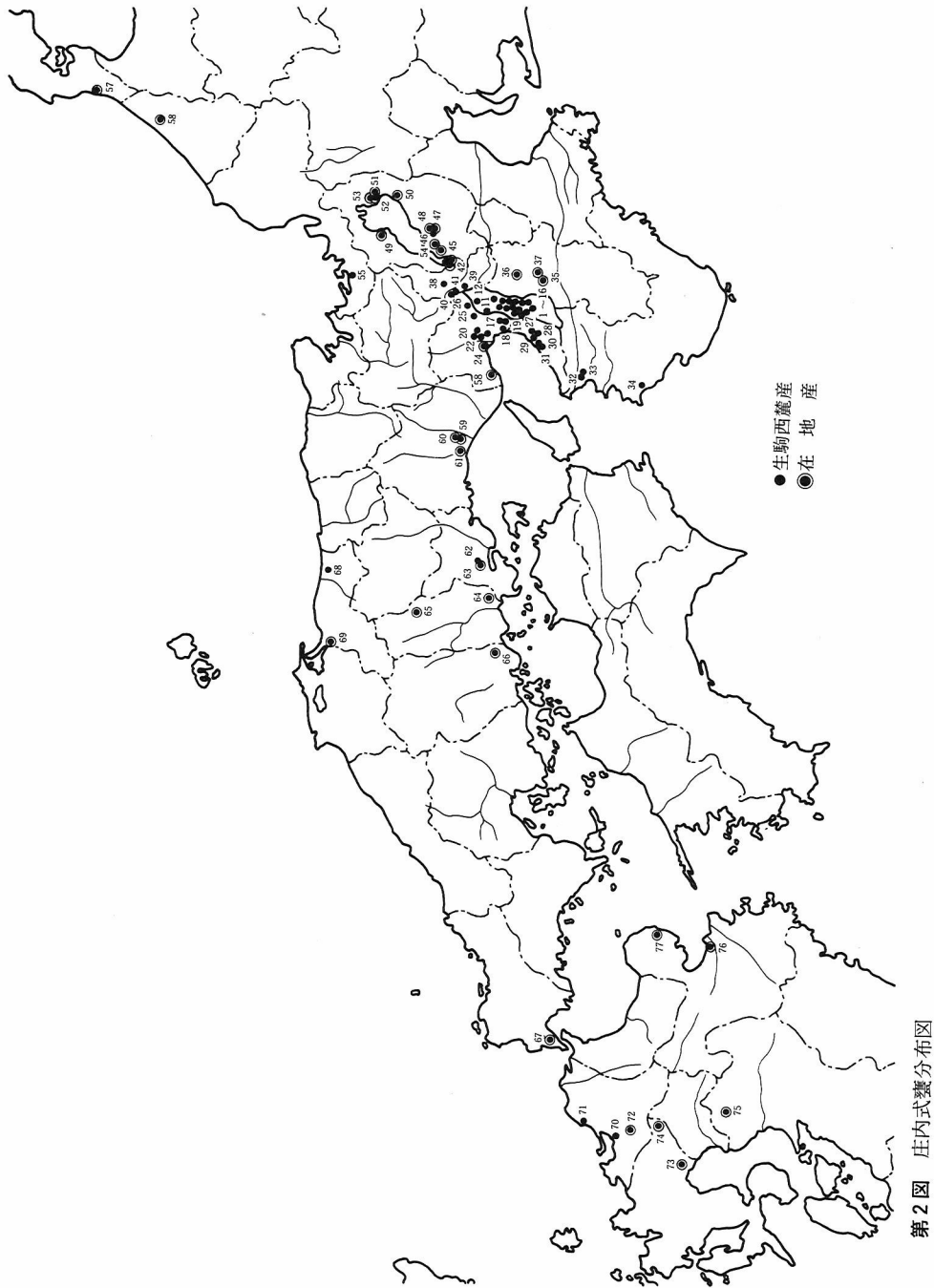
事実は、北九州における拠点集落の存在を示唆している。しかしながら岡山県以西の広島県、山口県下の瀬戸内沿岸部に出土例が現在のところなく、明確なルートは不明である。南限地域である和歌山県においては、御坊市南塩屋遺跡⁽¹⁹⁾で出土している。他に和歌山県下では和歌山市吉田遺跡⁽²⁰⁾、太田・黒田遺跡⁽²¹⁾で出土例がある。北限地域を示す福井県西部では、小浜市口背湖遺跡⁽²²⁾で出土例がある。この地に至るルートは、琵琶湖までは淀川をさかのぼり、さらに湖西から若狭に抜けたものと思われる。

以上の様に生駒西麓産の庄内式甕の東限、西限、南限、北限地域を見て来たが、他に山陰地方においても出土例がある。鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡⁽²³⁾がそれで、当時としては山陰地方というのは九州よりも持ち運びが困難な地域であったであろう。そのルートとしてはいくつか考えられるが、最も有力なのは兵庫県西部あるいは岡山県東部より中国山地を河川沿いに越えて行ったものと思われる。

一方、河内周辺地域においては弥生時代より歴史的、地理的に見て集落間の交流が活発であったため豊富に搬出されている。特に摂津、和泉、大和が遺跡数・搬出量とも他地域を圧している。その代表的な遺跡は、摂津では大阪市加美遺跡⁽²⁴⁾、豊中市小曾根遺跡⁽²⁵⁾、庄内遺跡⁽²⁶⁾、高槻市安満遺跡⁽²⁷⁾、茨木市東奈良遺跡⁽²⁸⁾などで、いずれも庄内期における摂津の拠点集落である。和泉では泉大津市豊中・古池遺跡⁽²⁹⁾、七ノ坪遺跡⁽³⁰⁾、池上遺跡⁽³¹⁾、岸和田市土生遺跡⁽³²⁾などである。大和においては天理市布留遺跡⁽³³⁾、桜井市纏向遺跡⁽³⁴⁾、藤原宮下層⁽³⁵⁾などが挙げられる。これらの摂津、和泉、大和の諸遺跡では、前述のごとく生駒西麓産の庄内式甕の出土量が多く、とりわけ摂津、和泉においては小形の甕を除き在地産の甕はあまり生産されなくなり、日常的に使用する甕は大部分生駒西麓産の庄内式甕の供給を受けていたものと考えられる。しかし、大和では摂津、和泉の状況とは若干相違が見られる。特に纏向遺跡に顕著である庄内大和型⁽³⁶⁾と呼ばれる在地産の甕を中心に使用しており、生駒西麓産の庄内式甕の出土量は、摂津、和泉と比べて少量である。

このように生駒西麓産の庄内式甕は、四国を除く西日本一帯に広く分布しており、現在での出土遺跡数は34遺跡を数え、分布範囲の広さ、搬出量の多さは、庄内期の大きな特徴であり、前後の時期には認められない現象である。

次に、生駒西麓産の庄内式甕を模倣している土器が出土する遺跡が西日本各地に認められるが、その分布状況を見ると、生駒西麓産の庄内式甕の分布範囲よりもさらに広範囲にわたっている。現在のところ、東限は滋賀県東部、西限は熊本県北部、南限は和歌山県北部、北限は石川県北部である。この分布状況を細かく見て行くと、九州では生駒西麓産の庄内式甕は津屋崎町今川遺跡のみであるが、在地産の庄内式甕は、福岡市三疊遺跡⁽³⁷⁾、春日市柏田遺跡⁽³⁸⁾、佐賀市姫方原遺跡⁽³⁹⁾、鳥栖市本川原遺跡⁽⁴⁰⁾、山鹿市白石遺跡⁽⁴¹⁾、大分市守岡遺跡⁽⁴²⁾、国東市安国寺遺跡⁽⁴³⁾の7遺跡で出土している。中国地方では瀬戸内海岸に沿って点々と出土している。西から下関市綾羅木郷遺跡⁽⁴⁴⁾、神辺町御領遺跡⁽⁴⁵⁾、倉敷市上東遺跡⁽⁴⁶⁾、岡山市川入遺跡⁽⁴⁷⁾で出土している。山陰地方では米子市尾高城下層⁽⁴⁸⁾で出土例があり、山間部においては北房町谷尻遺跡⁽⁴⁹⁾で出土している。北陸地方で



第2図 庄内式甕分布図

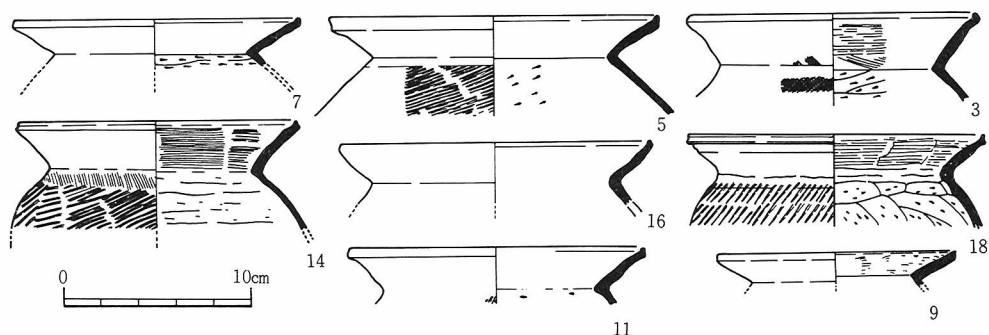
第2図～第8図・表注

第2図、第8図の庄内式甕分布図、移動図の遺跡番号および第3図～第7図の土器番号はすべて庄内式甕分布表の番号と一致するものである。

第1表 庄内式甕分布表

番号	旧国名	遺 跡 名	所 在 地	出土遺構・層位	生駒西麓産	在地産	文 献
1	河 内	西 岩 田	大阪府東大阪市	溝・土壇・包含層	○		1・2
2		瓜 生 堂	大阪府東大阪市	溝・土壇・土器溜等	○		3・4・5
3		山 賀	大阪府東大阪市	井戸・溝・土壇・包含層	○		6
4		鬼 塚	大阪府東大阪市	土壇・包含層	○		7・8
5		北 鳥 池	大阪府東大阪市	包含層	○		9・10
6		馬 場 川	大阪府東大阪市	井 戸	○		11
7		池 島	大阪府東大阪市	包含層	○		12
8		八 尾 南	大阪府八尾市	井戸・土壇等	○		13
9		中 田	大阪府八尾市	土壇・包含層	○		14・15
10		東 弓 削	大阪府八尾市	包含層	○		16
11		茨 田 安 田	大阪府大阪市	包含層	○		17
12		茄 子 作	大阪府枚方市	——	○		注(11)
13		上 田 町	大阪府松原市	包含層	○		注(3)
14		船 橋	大阪府柏原市	土壇・包含層	○		注(4・18・19)
15		川 北	大阪府藤井寺市	井 戸	○		20
16		東 阪 田	大阪府羽曳野市	建 物	○		21
17		瓜 破 北	大阪府大阪市	方形周溝墓・土壇等	○		22
18		森 の 宮	大阪府大阪市	包含層	○		23
19		加 美	大阪府大阪市	住居址	○		注(24)
20	摂 津	利 倉 西	大阪府豊中市	——	○		24
21		島 田	大阪府豊中市	——	○		25
22		小 曾 根	大阪府豊中市	——	○		注(25)
23		庄 内	大阪府豊中市	包含層	○		注(2)
24		田 能	兵庫県尼崎市	包含層	○	○	26
25		安 満	大阪府高槻市	方形周溝墓・井戸・土壇	○		注(27)
26		東 奈 良	大阪府茨木市	溝・土壇等	○		注(28)
27	和 泉	豊 中 ・ 古 池	大阪府泉大津市	旧河川状遺構	○		注(29)
28		七 ノ 坪	大阪府泉大津市	住居址	○		注(30)
29		池 上	大阪府泉大津市	井 戸	○		注(31)
30		上 町	大阪府和泉市	包含層	○		27
31		土 生	大阪府岸和田市	溝	○		注(32)
32	紀 伊	吉 田	和歌山県和歌山市	——	○		注(20)
33		太 田 ・ 黒 田	和歌山県和歌山市	——	○		注(21)
34		南 塩 屋	和歌山県御坊市	——	○		注(19)
35	大 和	藤原宮下層	奈良県橿原市	溝	○	○	注(35)
36		布 留	奈良県天理市	包含層	○	○	注(33)
37		纏 向	奈良県桜井市	溝・土壇等	○	○	注(34)
38	山 城	岡 崎	京都府京都市	包含層	○		28
39		木 津 川 河 床	京都府八幡市	包含層	○		29

番号	旧国名	遺 跡 名	所 在 地	出土遺構・層位	生駒西麓産	在地産	文 献
40	山城	森 本	京都府向日市	——	○		注(6)
41		城 ノ 内	京都府向日市	——	○		注(6)
42	近江	坂 口	滋賀県大津市	包含層		○	30
43		北 大 津	滋賀県大津市	包含層		○	30
44		滋 賀 里	滋賀県大津市	包含層	○		注(14)
45		観 音 堂	滋賀県草津市	溝		○	30
46		富 波	滋賀県野洲町	土 壇	○		注(13)
47		五 ノ 里	滋賀県野洲町	——		○	30
48		和 田	滋賀県野洲町	溝		○	30
49		森 浜	滋賀県新旭町	包含層		○	注(54)
50		西 野	滋賀県米原町	——		○	注(55)
51		高 田	滋賀県長浜市	——		○	30
52		宮 司	滋賀県長浜市	——		○	30
53		十 里	滋賀県長浜市	——		○	30
54		服 部	滋賀県守山市	溝		○	30
55	若狭	口 背 湖	福井県小浜市	住居址	○		注(22)
56	加賀	高 畠	石川県金沢市	——		○	注(50)
57	能登	次 場	石川県羽咋市	包含層		○	注(51)
58	播磨	吉 田 南	兵庫県神戸市	——	○	○	注(16)
59		長 越	兵庫県姫路市	溝	○	○	注(17)
60		橋 詰	兵庫県姫路市	包含層	○	○	注(52)
61		川 島 立 岡	兵庫県太子町	溝		○	注(53)
62	備前	百間川原尾島	岡山県岡山市	溝	○		注(18)
63		川 入	岡山県岡山市	包含層		○	注(47)
64	備中	上 東	岡山県倉敷市	包含層		○	注(46)
65	美作	谷 尾	岡山県北房町	住居址		○	注(49)
66	備後	御 領	広島県神辺町	溝		○	注(45)
67	長門	綾 羅 木 郷	山口県下関市	包含層		○	注(44)
68	因幡	長 瀬 高 浜	鳥取県羽合町	住居址	○	○	注(23)
69	伯耆	尾高城下層	鳥取県米子市	溝		○	注(48)
70	筑前	三 曇	福岡県福岡市	住居址	○	○	注(37)
71		今 川	福岡県津屋崎町	包含層	○		注(15)
72		柏 田	福岡県春日市	土壇・包含層		○	注(38)
73	肥前	姫 方 原	佐賀県佐賀市	住居址		○	注(39)
74		本 川 原	佐賀県鳥栖市	住居址		○	注(40)
75	肥後	白 石	熊本県山鹿市	——		○	注(41)
76	豊後	守 岡	大分県大分市	住居址		○	注(42)
77		安 国 寺	大分県国東市	包含層		○	注(43)



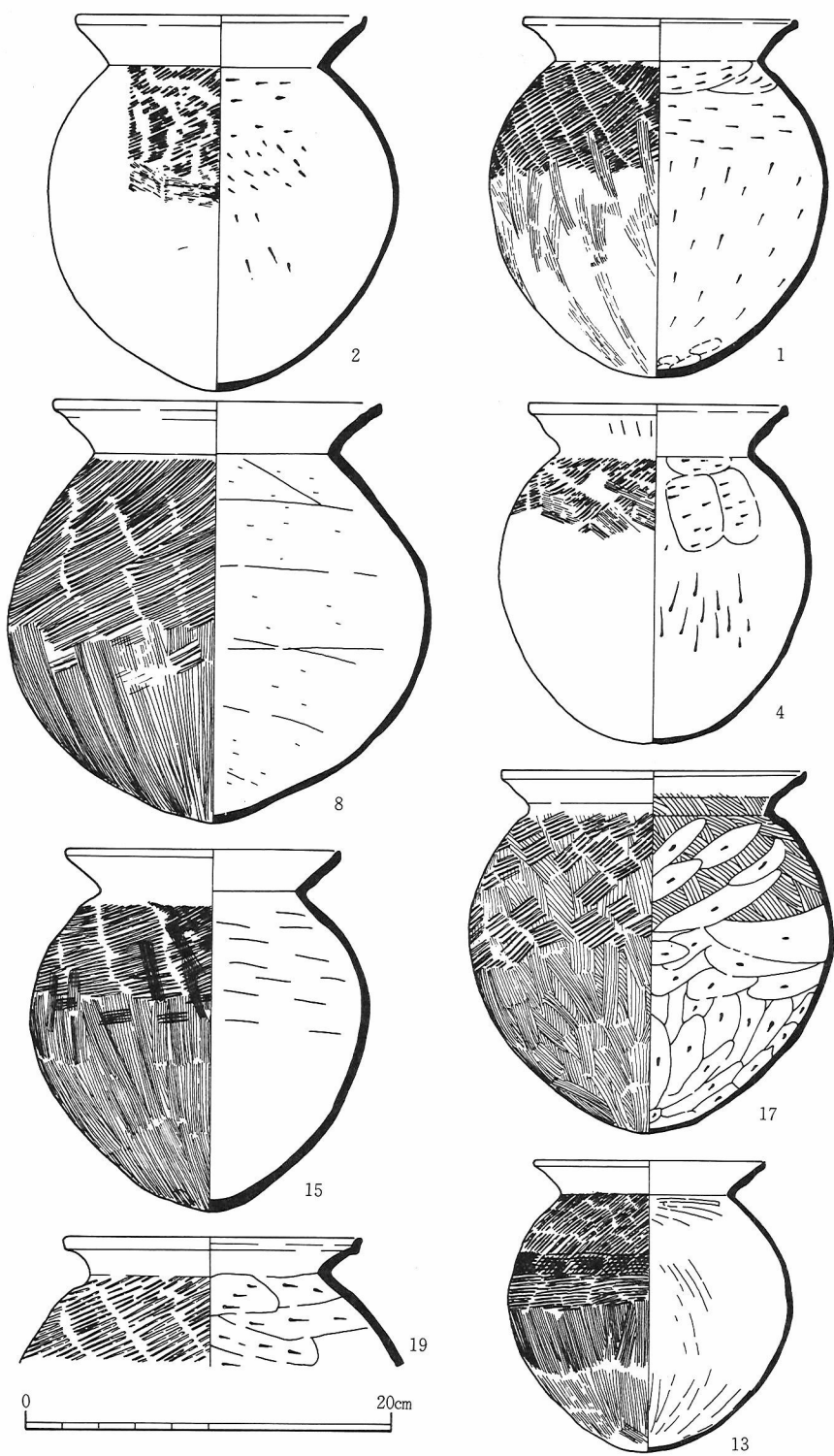
第3図 庄内式甕実測図

は金沢市高島遺跡⁽⁵⁰⁾、羽咋市次場遺跡⁽⁵¹⁾でそれぞれ出土例がある。畿内周辺地域では姫路市長越遺跡⁽⁵²⁾・橋詰遺跡⁽⁵³⁾、太子町川島立岡遺跡⁽⁵⁴⁾、新旭町森浜遺跡⁽⁵⁴⁾、米原町西野遺跡⁽⁵⁵⁾などで出土している。

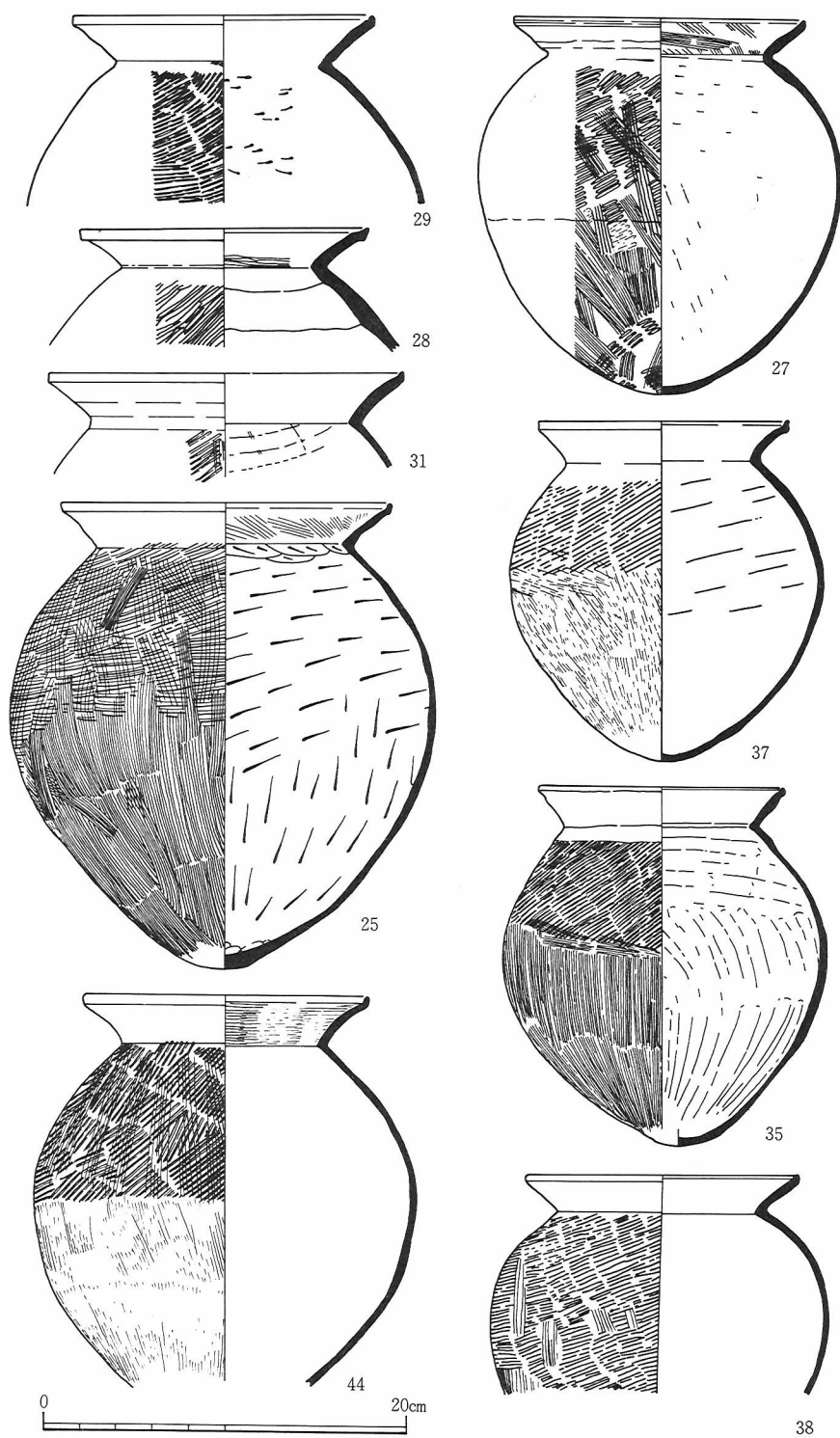
このように在地産の庄内式甕が出土している遺跡は、四国、南九州を除く西日本一帯、北陸地方の一部に広がっており合計35遺跡を数える。畿内及び畿内周辺部では在地産が少なく、河内より遠方になるほど在地産の出土数が増加する傾向にある。このことは生駒西麓産の庄内式甕の分布のあり方と相反する事実である。

ところで、西日本あるいは北陸地方各地で出土している在地産の庄内式甕は、概して生駒西麓産の庄内式甕と、器形・製作技法から見て同一型式内のものが大部分を占めるが、一部で若干差違を認めうるものがある。次場遺跡、川入遺跡、守岡遺跡の出土例がそれである。次場遺跡出土例は、胴部が長いたまご形を呈し、底部は平底であり、胴部外面の叩きは比較的粗い点などが相違する。しかし、底部から胴部下半にかけての刷毛目は、底部を丸くする意図で施していると考えられる。さらに口縁部の形態、胴部内面へう削りなどから見て庄内式甕の範疇に入れておきたい。川入遺跡出土例は、胴部外面の粗い叩き、刷毛目の未使用が相違する点であるが、全体的な形態、特に胴部の球形化、底部の完全な丸底化、胴部内面のへう削りなどに庄内式甕との共通点を認めることができる。守岡遺跡出土例は、胴部外面全面刷手目を施している。この技法は布留式土器に通有のものであるが、口縁端部のつまみ上げ、胴部の球形化、丸底の底部、胴部内面のへう削りなどの諸特徴及び供伴遺物から見て庄内期に属する土器である。以上のことから庄内式甕と認定したい。

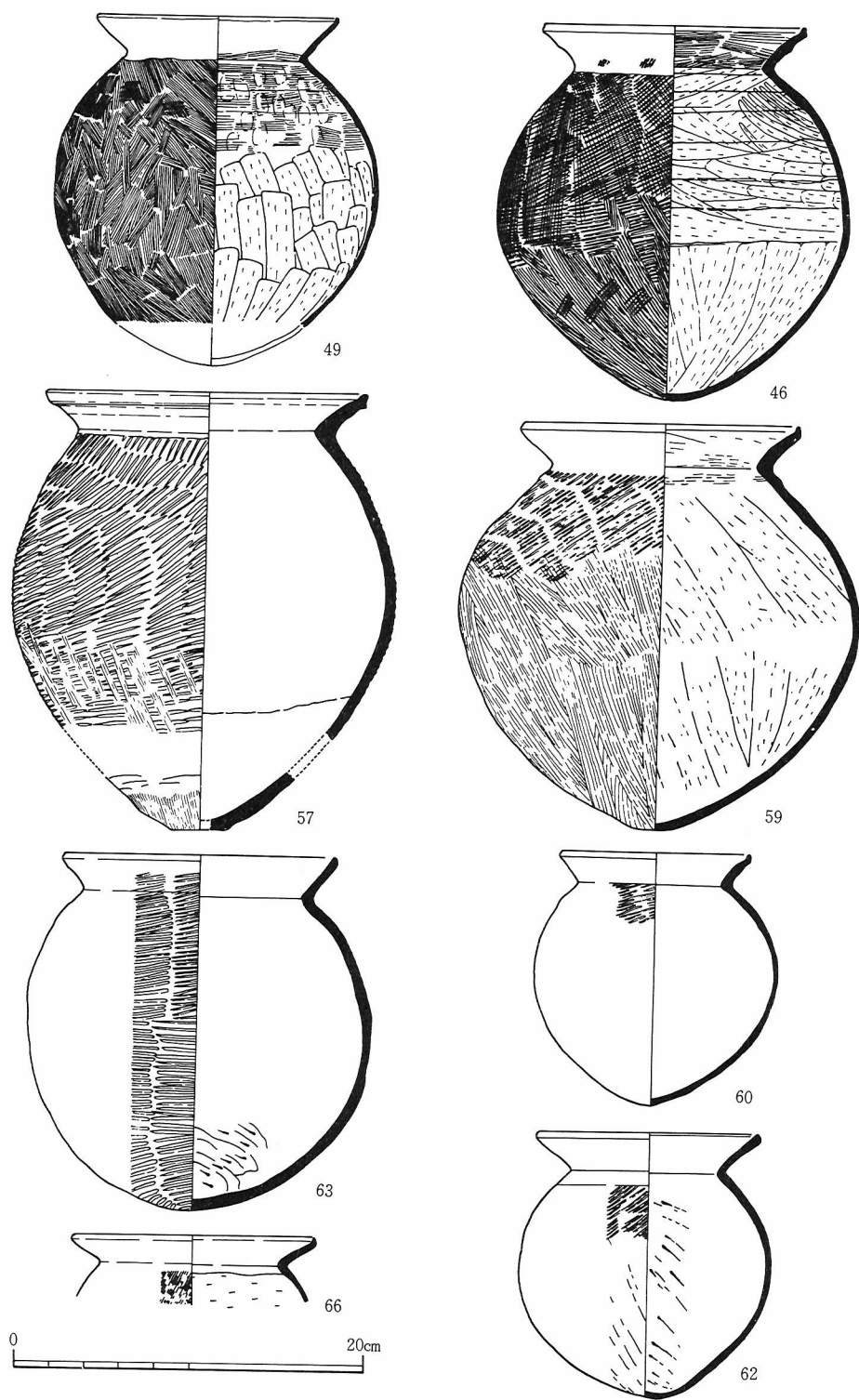
上記のように、在地産の庄内式甕が多数西日本、北陸地方に認められるという事実は、単に生駒西麓産の庄内式甕が搬入するのと違い、その製作技法が伝播したものであろう。その伝播経路は不明確な点が多いが、1つには北九州あるいは中国地方に認められるように、その地域の拠点集落にまず、生駒西麓産の庄内式甕が搬入され、その集落を中核としてさらに周辺地域の各集落へ技法が伝播し、在地産の庄内式甕を生み出したものと考えられる。この拠点集落は、北九州では今川遺跡であり、中国地方瀬戸内海沿岸では百間川原尾島遺跡であり、日本海沿岸では長瀬高浜遺跡である。さらに滋賀県下においては富波遺跡がこれに当たり、北陸地



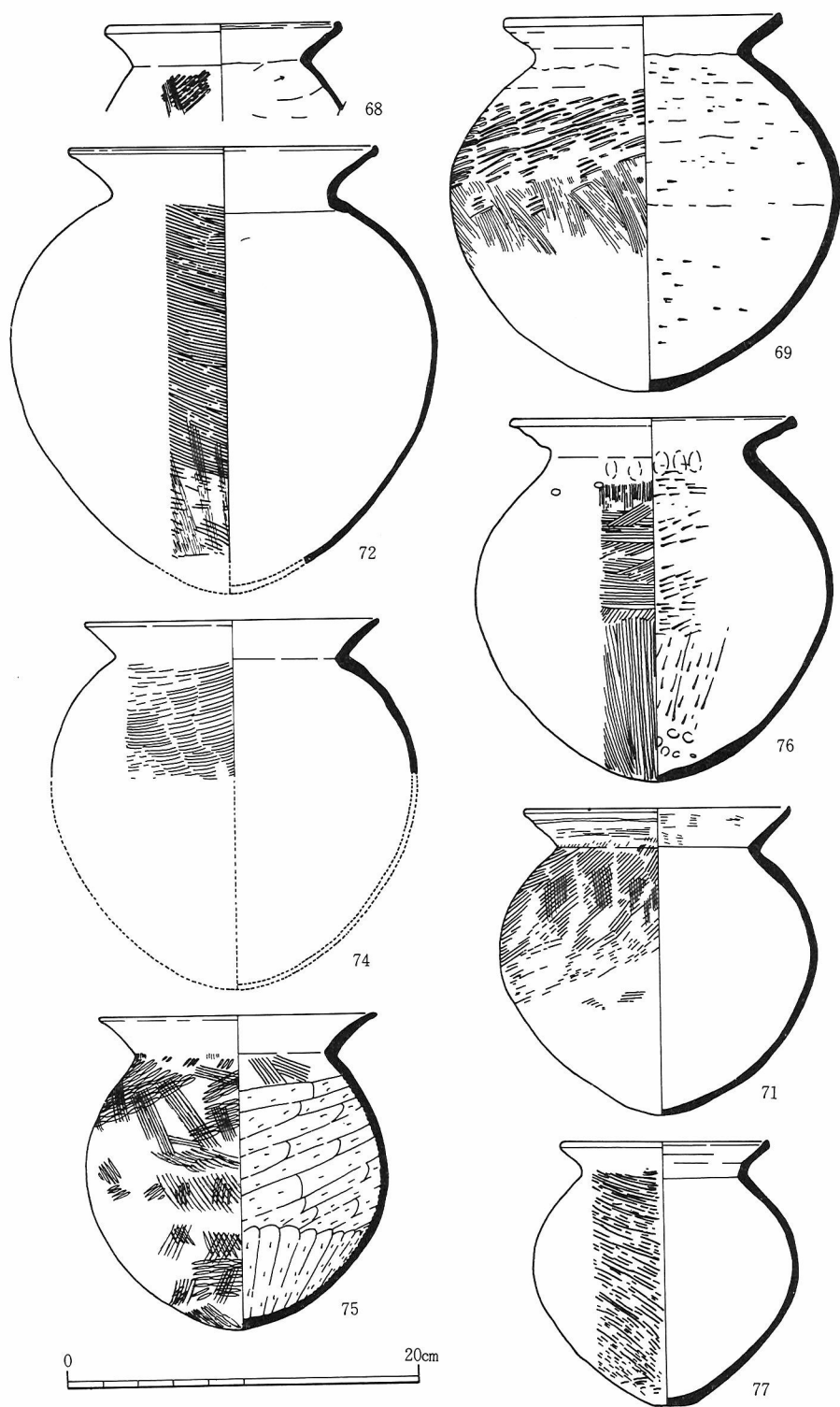
第4図 庄内式甕実測図



第5図 庄内式甕実測図



第6图 庄内式甕実測図



第7図 庄内式甕実測図

では少し遠離路ではあるが、口背湖遺跡がその役を果していたものと考えられる。

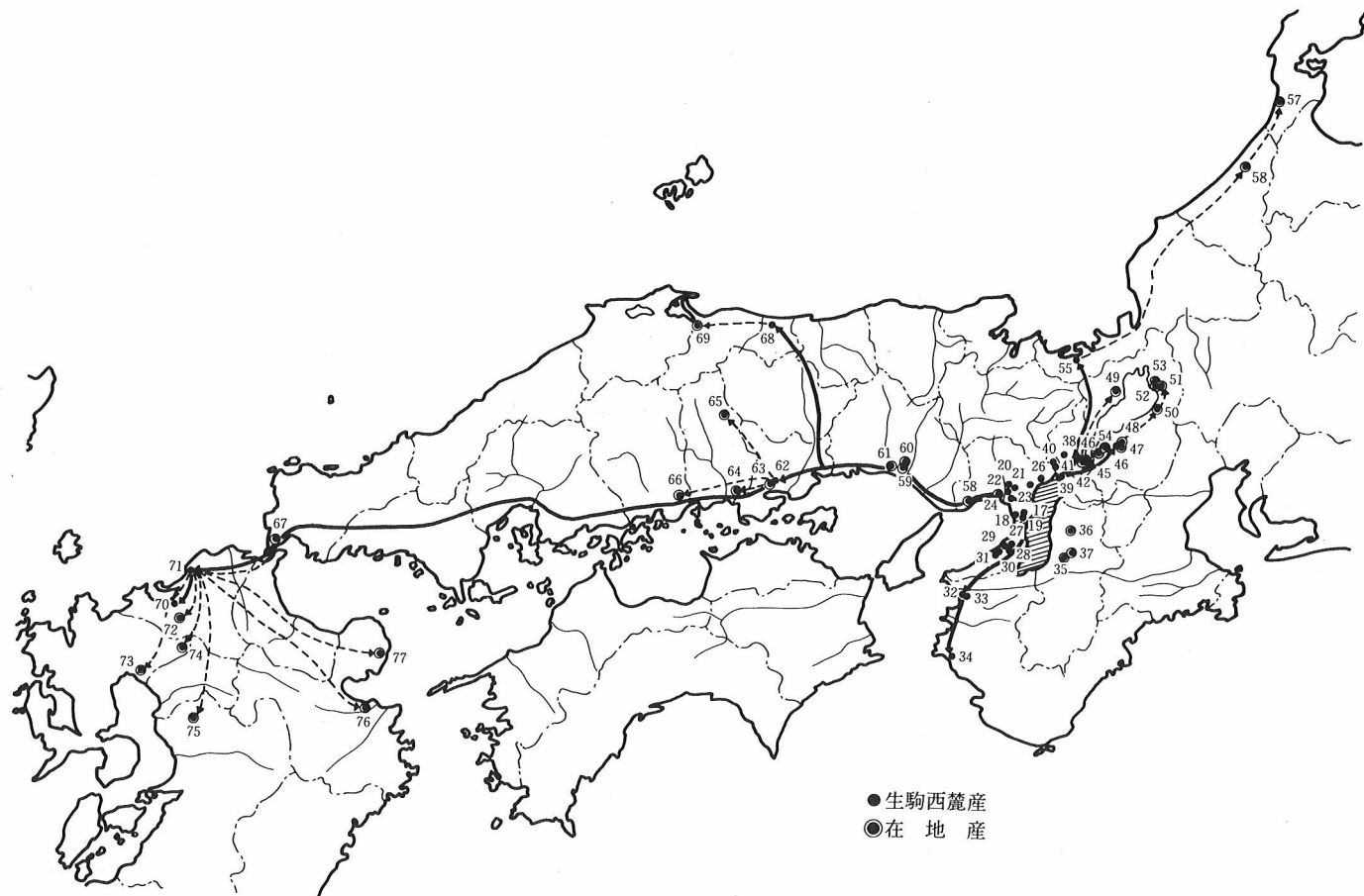
Ⅳ 意義

これまで生駒西麓産の庄内式甕と、その特徴的な技法伝播の分布範囲、搬出経路を述べて来た訳であるが、このような事実は何を物語っているのでしょうか。

この庄内期は、全国的に見て土器が活発に移動している時期である。東海地方のS字状口縁土器、岡山地方の酒津式土器、山陰地方の2重口縁土器、北陸地方の月影式土器などである。これらは分布範囲がごく限定された地域であり、その搬出量も少ない。唯、東海地方のS字状口縁土器は関東まで分布しており比較的広範囲である。器形はすべて甕であり、庄内式甕と共通する。しかしながら、庄内式甕の分布範囲に比べて分布圏が小さく、さらには技法の伝播というは見られない。庄内式甕の分布における大きな特徴は、分布圏の広大さ、搬出量の多さに加え、技法の伝播である。これが他地域産の甕の分布とは極立って相違する点であろう。北九州・中国地方、北陸地方に認められるように、まず生駒西麓産の庄内式甕をその地域の拠点集落を受け入れ、さらにその集落から周辺集落へ技法の伝播が成され、在地産の庄内式甕を生み出したものと考えられる。このように西日本、北陸地方の各集落が在地産の庄内式甕を生産しているという事実は、畿内、とりわけ河内との交流が活発であるということと、それまでの在地における伝統的な土器作りの一角がつきずれ、新しい技法である庄内式甕の製作技法を取り入れることにより、より河内との結び付きを強めていったと考えられる。

西日本各地の庄内期から布留期にかけての土器の変化を見てみると、布留期に入って、在地の土器に大きな変動が認められる。器種構成、各器形の形態、技法など、それまでの在地における伝統的な土器作りが根底からつきずれ、畿内で成立した布留式土器を受け入れ、生産するようになる。布留式土器を受け入れるのは各地域に時間的な前後関係があり、西日本全体で時を同じくして受け入れるのではない。かと言って畿内周辺部から波状的に各地域へ伝播する訳でもないように思われる。やはり、庄内式甕と同様、各地域の拠点集落に伝播し、その集落を核として周辺集落へ伝播するものと考えられる。この布留式土器を受け入れることにより、土器作りがより地域色をなくするという事実は、言い換えれば、より畿内化されたと言っても過言ではないと思われる。このように西日本における各地域の土器作りがより畿内化された時期が布留期であり、その先行形態として、生駒西麓産の庄内式土器、あるいはその技法の伝播をとらえることができよう。このことは、庄内式甕を受け入れ、さらにはそれを生産する地域が、他地域よりも早く布留式土器を受け入れ、畿内との密接な関係をさらに強固なものにして行ったと考えよう。

さて、生駒西麓産の庄内式甕、あるいはその特徴的な技法を受け入れている地域と、河内との密接な関係とはいかなるものであろうか。この問題については、現状では明確な解答を得られない。畿内における一つの土器をもって各集落間、地域間の関係を論定するのは困難である。しかしながら、庄内期から布留期にかけての社会が、より統一化へ向かって行く中で、土器の



第8図 庄内式甕移動図

移動がその一要素を形成する可能性があることを考慮に入れるべきであろう。

最後に本稿をまとめるにあたって、次の方々より資料の実見、御教示をいただいた、記して謝意を表するものである。

米子市教育委員会小原貴樹氏、京都府教育委員会平良泰久氏、岡山県教育委員会高見知功氏、大阪市文化財協会田中清美氏、鳥取県教育財団中部埋蔵文化財事務所野島珠美氏、京都府埋蔵文化財調査研究センター長谷川達夫氏、滋賀県五箇庄町教育委員会林純氏、奈良国立文化財研究所深沢芳樹氏、向日市教育委員会宮原晋一氏、豊中市教育委員会柳本照男氏

昭和58年2月1日稿了

追記

脱稿後、1年余りの内に新たな資料の追加を認めると同時に筆者の認識不足と怠慢から昭和58年までに報告書が刊行されていたにもかかわらず、収載できなかった資料が数多く存在している。これらの追加資料の多くは、昭和58年10月～11月に奈良県立橿原考古学研究所付属博物館で開催された「三世紀の九州と近畿」、さらに昭和59年1月に開催された埋蔵文化財研究会第15回研究集会「弥生文化の黎明期から古墳時代前期における地域間交流について」より引用している。

追加資料の遺跡数は、計20遺跡である。特に北部九州に多く認められ16遺跡にのぼる。この16遺跡の庄内式甕は、報告者によるとすべて在地産である。遺跡名は、久原瀧ヶ下遺跡、御床松原遺跡、西新町遺跡、多々良込田遺跡、那珂深ヲサ遺跡、瑞穂遺跡、板付周辺遺跡、井平ノ原遺跡、今光遺跡、小田道遺跡、神蔵古墳下層、塚堂遺跡、西一杉遺跡、西原遺跡、千塔山遺跡、赤塚古墳周濠である。四国は、今回初めて資料が得られた。香川県坂出市大浦浜遺跡である。在地産の庄内式甕である。四国へのルートはいくつか考えられるが、大浦浜遺跡出土のものは、対岸である岡山県から入ったと思われる。畿内では3例の資料が得られた。兵庫県西宮市西宮神社遺跡、大阪市崇禅寺遺跡、京都府長岡京市太田遺跡である。西宮神社遺跡出土資料は在地産で、他の出土例はいずれも生駒西麓産である。

以上のように追加資料をかかげたが、庄内式甕の移動に関する基本的な考え方は変わっていない。唯北部九州に多く認められる現象は、予想以上に畿内との関係が密接であることを示している。さらに四国において初めて庄内式甕を認めたが、将来的には生駒西麓産の庄内式甕が検出できる素地が四国にも存在するということで重要である。

今回、庄内式甕を中心として土器の移動についての一定の考え方を示した訳であるが、ただ単に庄内式甕の集成にとどまり、そこに内在する諸問題について十分な検討が出来なかった。今後、さらに資料の追加があると思われると同時に、布留式土器についても同様な検討が必要である。庄内式土器と布留式土器の検討を行なって始めて、畿内と他地域との関係を明確化できると考えている。このことについては、近い将来において論究したいと考えている。

第1図、第3図～第7図注

第1図の出典は注(11)P12の四であり、第3図～第7図の庄内式甕実測図の出典は、庄内式甕分布表中の文献よりそれぞれ引用掲載した。

注

- (1) 庄内式甕を模倣した土器は、畿内以外に多く存在する。特に中国地方、北九州地方に多く認められる。このような土器は、形態、製作技法とも生駒西麓産の庄内式甕の特徴を備えている。相違するのは胎土だけである。従って、形態、製作技法が同一に近いものは庄内式甕の範疇に入りたい。
- (2) 田中琢「布留式以前」(『考古学研究』第12巻第2号 考古学研究会 1965年)
- (3) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」(『大阪府立島上高等学校研究紀要』大阪府立島上高等学校 1969年) 第5図
- (4) 田辺昭三、原口正三、田中琢、佐原真『船橋』Ⅱ(平安学園考古学クラブ 1963年)
- (5) 石野博信、関川尚行『縄向』(樫原考古学研究所編 桜井市教育委員会 1976年)
- (6) 都出比呂志「古墳出現前後の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会 1974年)
- (7) 前掲注(6)
- (8) 酒井龍一「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」(『考古学研究』第24巻第2号 考古学研究会 1977年)
- (9) 坪井清足『岡山縣笠岡市高島遺跡調査報告』(岡山縣高島遺跡調査委員会 1956年) P25～P29
- (10) 古墳時代の祭祀形態は、実態が今一つ不明確であるが、小型三種の供献土器を使用した極めて政治性の強い祭祀であり、大和形祭祀と呼ばれている。
- (11) 『もちはこばれた河内の土器』(東大阪市立郷土博物館 1980年) P12
- (12) 現在知り得る遺跡は大阪府枚方市茄子作遺跡出土の壺1点である。
- (13) 本田修平、坪内宏司他「滋賀県下の庄内式土器」(『滋賀文化財だより』No.9 財団法人滋賀県文化財保護協会 1977年)
- (14) 田辺昭三、加藤修、松沢修他『湖西線関係遺跡調査報告書』(湖西線関係遺跡調査団 1973年) 第54図、第55図、第56図
- (15) 酒井仁夫、伊崎俊秋『今川遺跡』(『津屋崎町文化財調査報告書』第4集 津屋崎町教育委員会 1981年) 第33図
- (16) 前掲注(11)P23
- (17) 松下 勝、岡崎正雄他『播磨長越遺跡』(兵庫県教育委員会 1978年)
- (18) 江見正己他『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ 百間川原尾島遺跡Ⅰ』(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会 1980年) 第31図
- (19) 前掲注(11)P23
- (20) 前掲注(11)P23
- (21) 前掲注(11)P23
- (22) 前掲注(11)P23
- (23) 清水真一他『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅲ(『天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人鳥取県教育文化財団 1980年) 挿図203
- (24) 『加美遺跡現地説明会パンフレット』(長原遺跡調査会 1977年)
- (25) 豊中市教育委員会 柳本照男氏より御教授を賜った。
- (26) 田中琢「布留式以前」(『考古学研究』第12巻第2号 考古学研究会 1965年)
- (27) 森田克行、橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書』9地区の調査(『高槻市文化財調査報告書』第10冊 高槻

市教育委員会 1977年) 第20図、第21図

- (28) 井上直樹、山口衣代他『東奈良』発掘調査概報Ⅰ(東奈良遺跡調査会 1979年) 図版114
- (29) 坂口昌男、酒井龍一、芋本隆裕他『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのⅢ(豊中・古池遺跡調査会 1976年) 図版第23、図版第24
- (30) 井藤徹、中井貞夫『七ノ坪遺跡発掘調査概報』(大阪府教育委員会 1969年) 第8回
- (31) 井藤暁子、藤田雅子他『池上遺跡』第2分冊 土器編(財団法人大阪文化財センター 1979年) fig-52
- (32) 酒井龍一他『土生遺跡』(『第2次発掘調査概要』岸和田市遺跡調査会 1975年) 図版第4
- (33) 置田雅昭「大和における古式土師器の実態」(『古代文化』第26巻第2号 財団法人古代学協会 1974年) 第5図
- (34) 前掲注(5)
- (35) 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60号第2巻 日本考古学会 1976年) 第5図
- (36) 大和に見られる在地産の庄内式甕で、その特徴は、胴部外面の右下りの細かい叩き、内面ヘラ削りが頸部直下より行なうことによる稜のにおきなどである。
- (37) 柳田康雄、森田勉他『三雲遺跡』Ⅲ(『糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査 福岡県文化財調査報告書』第63集 福岡県教育委員会 1982年)
- (38) 松岡史、井上裕弘他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』(『春日市・柏田遺跡の調査』第4集下巻 福岡県教育委員会 1977年) 第135図、第136図
- (39) 『姫方原遺跡』(『佐賀県文化財調査報告集』第33集 佐賀県教育委員会 1976年)
- (40) 杠一義、藤瀬禎博『本川原遺跡』(『鳥栖市永吉町所在遺跡発掘調査報告書』佐賀県教育委員会 1979年) 第18図
- (41) 高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」(『古文化談義』第6集 九州古文化研究会 1979年) 第2図
- (42) 羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ」(『古文化談義』第5集 九州古文化研究会 1978年) 第19図
- (43) 小田富士雄、武末純一他「高島遺跡」(『古文化談義』第3集 九州古文化研究会 1976年) 第27図
- (44) 山内紀嗣他「古墳時代」(『綾羅木郷遺跡発掘調査報告』第1集 下関市教育委員会 1981年) 第300図
- (45) 三好晴弘、嶋田滋他『神辺御領遺跡』(『神辺農業協同組合御野支所建設にかかる』広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化調査センター 1980年) 第21図
- (46) 柳瀬昭彦他「川入・上東」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年)
- (47) 正岡睦夫、枝川 陽他「川入遺跡の調査」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974年)
- (48) 小原貴樹『尾高城址』Ⅱ(『米子市尾高城址発掘調査報告』尾高城址発掘調査団 米子市教育委員会 1979年) 図27
- (49) 高畑知功他「二宮遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 岡山県教育委員会 1976年)
- (50) 橋本澄夫「金沢市高島遺跡一第1・2次発掘調査報告書」(『金沢市文化紀要』8 金沢市教育委員会 1975年)
- (51) 浜岡賢太郎、谷内尾晋司他『羽咋市吉崎・次場遺跡』(『第3次発掘調査概報』羽咋市教育委員会 石川考古学研究会 1975年) 第21図
- (52) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態(二)」(『考古学研究』第16巻第1号 考古学研究会 1969年) 第17図
- (53) 石野博信他『川島・立岡遺跡』(太子町教育委員会 1971年) 第101図
- (54) 前掲注(13)第2図
- (55) 前掲注(13)P 4

表文献

1. 上野利明「西岩田遺跡出土の土師器について」(『調査会ニュース』№16 東大阪市遺跡保護調査会 1980年)
2. 荻田昭次・北野保『西岩田遺跡』(『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概報』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971年) 図版18、図版19
3. 堀江門也・中西靖人他『瓜生堂』(『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター 1980年) 第145図、第146図
4. 玉井功・小野久隆・井藤暁子他『巨摩・瓜生堂』(『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター 1981年) 第132図、第143図
5. 田代克己・中西靖人・今村道雄他『瓜生堂遺跡』Ⅱ 瓜生堂遺跡調査会 1973年) 図版55
6. 芋本隆裕「山賀遺跡発掘調査概報」昭和54・55年度(『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1980年度東大阪市遺跡保護調査会 1981年) 第70図
7. 下村晴文『鬼塚遺跡発掘調査概要』Ⅰ(『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報』17 東大阪市教育局委員会 1978年) 図面 5
8. 芋本隆裕『鬼塚遺跡』Ⅱ(『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19 鬼塚遺跡Ⅱ 若江遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会 1979年) 第18図
9. 『河内古代遺跡の研究』(『大阪府立花園高等学校地歴部五周年記念』大阪府立花園高等学校地歴部 1970年) 図一 6
10. 芋本隆裕「北鳥池遺跡出土土器の再整理」(『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度 東大阪市遺跡保護調査会 1980年) 第 5 図
11. 下村晴文・福永信雄・芋本隆裕(『馬場川遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会 1977年) 図面 4 図面 5
12. 阿部嗣治・上野利明「北鳥池遺跡・池島遺跡発掘調査概報」(『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1980年度 東大阪市遺跡保護調査会 1981年) 第51図
13. 米田敏幸・原田昌則他『八尾南遺跡』(『大阪市高速電気軌道 2 号線建設に伴う発掘調査報告書』八尾南遺跡調査会 1981年) 図67、図72、図89、図90、図99、図101、図107、図111、図116、図134、図135、図139 図142、図147、図148、図149、図151、PL11～29
14. 山本昭『中田遺跡』(『中田遺跡調査報告Ⅰ、日本電信電話公社大阪東地区管理部地下線埋設工事に伴う調査』中田遺跡調査センター 1974年) 図版第 5
15. 山本昭『中田遺跡』(『中田遺跡調査報告Ⅱ 昭和49年度国庫補助事業中田遺跡範囲確認調査』八尾市教育局委員会 1975年) C 地点出土遺物実測図 A
16. 山本昭他『東弓削遺跡』(『八尾市文化財調査報告 3、大阪府水道部送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査』八尾市教育局委員会 1976年) 図版13
17. 玉井功『茨田安田遺跡発掘調査概要』(『大阪府文化財調査概要』1974—5 大阪府教育委員会 1975年) 図版第14
18. 中西靖人・國乗和雄『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書』(『大阪文化財センター調査報告××』財団法人大阪文化財センター 1976年) 図版26
19. 西口陽一『船橋遺跡発掘調査概要』(『大阪府文化財調査概要』1979年 大阪府教育委員会 1980年) 図版第26
20. 岩崎二郎・岩瀬透『川北遺跡発掘調査概要』(『府立藤井寺養護学校用地内埋蔵文化財調査』大阪府教育委員会 1981年) 第27図
21. 笠井敏光・畑本政美他『東阪田遺跡』1980年(『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書』6 羽曳野市教育局委員会

1980年) 図13

22. 永島暉臣・田中清美他『瓜破北遺跡』(『共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会 1980年) 図版34
23. 中尾芳治・八木久栄他『森の宮遺跡』(『第3・4次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会 1978年) Fig68
24. 豊中市教育委員会 柳本照男氏より御教授を賜った。
25. 豊中市教育委員会 柳本照男氏より御教授を賜った。
26. 福井英治・村川行弘・石野博信他『田能遺跡発掘調査報告書』(『尼崎市文化財調査報告』第15集 尼崎市教育委員会 1982年) 第37図
27. 酒井龍一他『上町遺跡発掘調査概要』(和泉市教育委員会 1975年)
28. 橋本久・浪見毅他「円勝寺の発掘調査」(上)(『佛教藝術』82号 円勝寺発掘調査団 毎日新聞社1970年) 74P
29. 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 長谷川達夫氏より御教授を賜った。
30. 本田修平・坪内宏司他「滋賀県下の庄内式土器」(『滋賀文化財だより』No.9 財団法人滋賀県文化財保護協会 1977年)